ひ　か　り　結　ぶ　ま　ち

かりや景観れぽーと

テーマ
お城のあるまちづくり

VOL.26

発行日：平成30年３月１日
発　行：刈谷市まちづくり推進課
ＴＥＬ：(0566)62-1022

今回の景観れぽーとは、平成 29 年 10 月に実施した「かりや景観づくり講座」についてご紹介します。

今年度は、「お城のあるまちづくり」をテーマとし、当日は名古屋市立大学名誉教授の瀬口先生と、元株式会社黒壁常務の伊藤光男氏を講師としてお招きし、景観まちづくりに関する講義を実施しました。また、滋賀県長浜市の「長浜城」、「黒壁スクエア」で景観まちあるきを実施しました。

長浜城

黒壁スクエア

かりや景観づくり講座

市民の皆さんに景観形成に対する意識をより高めてもらい、皆さんの手による景観まちづくりや、良好な景観の形成につながる機会としていただくことを目的に、平成 15 年から毎年実施しています。

講師のご紹介

瀬口　哲夫 先生　（名古屋市立大学名誉教授・工学博士）

専門　歴史的遺産を活用したまちづくり、近代建築史

経歴　豊橋技術科学大学建設工学系助教授、名古屋市立大学芸術工学部教授・芸術工学部長を経て、平成 23 年４月より名古屋市立大学名誉教授。
現在、刈谷市都市計画審議会会長、名古屋市歴史的風致維持向上計画協議会会長、名古屋城全体整備計画検討会議座長、岡崎城跡整備基本計画検討委員会委員長など。

伊藤　光男 氏　（元株式会社黒壁　常務）

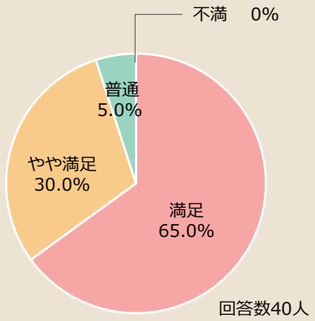
経歴　株式会社 新長浜計画 社長
特定非営利法人まちづくり役場　理事
黒壁発足当時最年少役員。黒壁のショップ展開、ならびにまちなかの空き家・空き店舗の活用に関しても別会社を設立し、長浜のまちづくりに大いに貢献してきました。

（NPO 法人長浜まちづくり役場ホームページより）

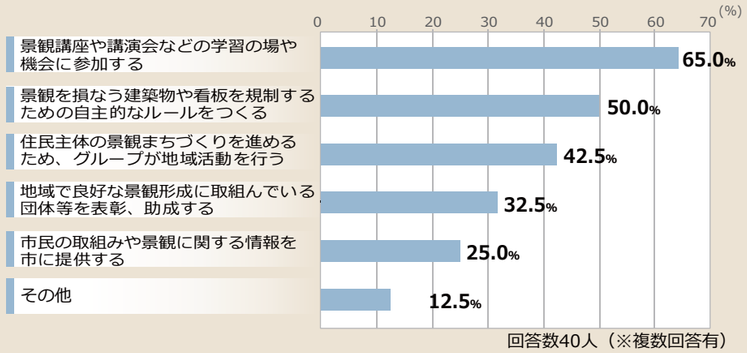
かりや景観づくり講座への参加者の声

かりや景観づくり講座終了後、参加者の方にアンケートのご協力をいただきました。ここではその結果の一部をご紹介します。

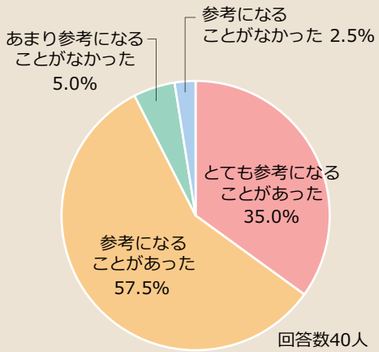
Q1 講座の内容はいかがでしたか？



Q3 市民が主体的になって景観まちづくりを進めていくにはどのようなことに取り組むことが効果的だと思いますか？



Q2 今後の景観づくりの参考になることはありましたか？



Q4 参考になったことやご意見をお聞かせください。

- 城の築城だけでなく、城下町目線でまちづくりをすすめる重要さを学んだ。また城や建物などハードウェアのみならず、町名や道名などを継承するなど、ソフトウェアについても大切だと思いました。
- まちづくりには、長い時間と人の理解が必要です。もっと子供が参加でき、次世代につながる仕組みがあればいいと思います。
- 古い建物を活用し、皆で協力しあえばまちおこしができ、活発なまちに変わる事を知りました。刈谷も皆で協力しあえば、花いっぱいのまちとか、若者のまちとか、変えることができると思います。
- お城のあるまちづくりは素敵だなと思いました。

長浜城

景観まちあるき①

現在の長浜城は、故東京工業大学名誉教授藤岡通夫工学博士の設計指導により、昭和 58 年に再興され、市立長浜城博物館として開館。本館の外観は、２層の大屋根に望楼※をのせた初期天守の様式で、「秀吉の長浜城」を再興しようという市民の熱望によって、天正期の城郭を想定し、建築されています。

最上階の望楼は回廊になっており、城下や琵琶湖や山々を見渡すことができます。

※望楼：遠くを見るために立てたやぐら。

かつての町名の由来や、名前そのものから当時のまちの様子を知ることができます。

「長浜曳山祭の曳山行事」が日本全国の「山・鉾・屋台行事」とともに、平成 28 年 11 月 30 日にユネスコ無形文化遺産に登録されました。

曳山とは山車のことで、旧長浜町に属する各町と、七郷と呼ばれる隣接集落が参加し、13 基の曳山があります。市内各地の山蔵に格納されており、市の景観重要建造物に指定されています。

ボランティアガイドさんに案内していただきながら、じっくり景観まちあるきをしました。

黒壁スクエア

景観まちあるき②

城下町の風情が漂うまちなみ。庇と屋根の高さが、それぞれほぼ同じ位置にあり、その連続性により気持ちのいい空間となっています。

㈱黒壁の主な産業であるガラスを用いたまちの案内板。建物と調和したシンプルなデザインとなっています。

景観講座② 講師：伊藤氏（元株式会社黒壁 常務）

【長浜・黒壁まちづくり運動】

黒壁は明治時代に建てられた銀行の建物です。当時の建物は黒漆喰が塗られ、通称で黒壁銀行と言われるくらい、まちのシンボル的な建物でした。昭和時代の経済不況で倒産してしまいましたが、そこをキリスト教会が買い取り、教会としてしばらく使われていました。その後、信者が増えたことにより、駐車場確保の必要性から移転することとなり、再び売りに出されることとなりました。そこで、市と地元住民が何とか残せないかということで、それぞれがお金を出し合い、昭和 63 年 4 月にまちの活性化を目的とした株式会社を設立し、その拠点として黒壁を購入しました。

ところが、会社を設立するも事業が明確に決まっておらず、様々な議論がなされた結果、ガラスを売ることとなりました。宣伝するにもお金がないなか、ある時、NHK 放送で紹介されたことをきっかけに多くの人に知ってもらうことができました。ようやくお客さんが増えてきた頃、まちにもっと滞在してもらうために、「物を売るだけではなく、事を売り、物語を持って帰ってもらう」という思いから、ガラス工房を始め、人気を獲得しました。

黒壁一帯はかつて城下町であったため、古風な建物も残っていました。商店街店舗の改修をするにあたっては、この地域が準防火地域に指定されていることから、木材をあらわにした昔の風情を出すような建物を新たにつくることはできなかったため、建物のファサード（正面部分）を改修して今のまちなみができました。

「城のあるまちづくり」について

景観講座でお話していただいた内容を紹介します。

景観講座① 講師：瀬口先生（名古屋市立大学名誉教授）

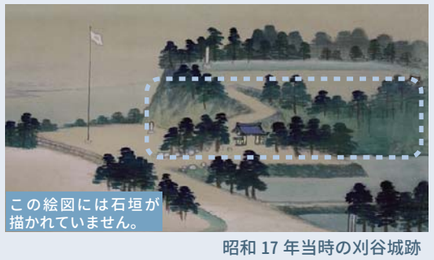
【刈谷城にはなぜ石垣がないか】

織田信長が築いた小牧城（1563 年）が、石垣を使用した近世城郭の最初といわれています。1533 年に水野忠政によって築城された刈谷城は、土塁の城郭と考えられています。1590 年の小田原平定で、徳川家康が江戸に移封された後、豊臣秀吉の家臣である田中吉政が西三河に入り、領内の岡崎城では石垣整備が行われましたが、刈谷城では行われなかったようです。

ところが、江戸時代の複数の刈谷城図には、大手門まわりや本丸の南東部などに石垣が描かれています。大手門から刈谷城に入り、大手門から本丸表門に向かう道筋では、刈谷城の石垣がきれいに見えますが、これは戦闘目的というより、お城としての威容を整えるために景観を良くしたということになります。

廃藩置県後の明治 6 年、愛知県権典事より、無用となった刈谷城の建物・木石の見積りを差し出すようにという通達が出されています。さらに、明治９年、刈谷城内の石垣について、「鉄道用に使うと聞いているが、入札で払い下げることが適当である」という県への上申が「刈谷町庄屋留帳」に記されています。この時、刈谷城の石垣は取り払われ、明治初期の鉄道建設に使用されたのではないかとされています。もちろん、昭和 17 年の吉田初三郎の絵図には石垣は描かれていません。このように、刈谷城は土の城、石垣のある城、そして再び土の城に戻ったというわけです。

文献等を参考に作成した刈谷城復元のイメージ図



昭和 17 年当時の刈谷城跡
『刈谷城跡図』 吉田初三郎（刈谷市郷土資料館蔵）

【通り名のない武家屋敷】

刈谷城の武家屋敷は、司町二丁目などにありましたが、街区単位の町名なので、どの通りなのかわかりづらいです。また、緒川町などと呼ばれていた武家屋敷地内の通りは、今でも狭い道で昔日の面影があります。中央公園の南側や八幡町あたりも武家屋敷であったところですが、通りに名前がないため、わかりづらいです。

元刈谷川を挟んで、城下町と反対側に複数のお寺が並ぶのは刈谷城下町の特徴です。なかなか良い川沿いの小道ですが、寺道として整備されていません。刈谷城や城下町の旧状がわかるように、通称でも良いから通り名を明示するとともに、寺道を整備し、刈谷城下町の「見える化」に努力して欲しいと思います。

講座では、「刈谷城にはなぜ石垣がないのか」と、「刈谷城下町の特徴」について解説していただきました。